

かる子ちゃん



(四)

桜 田 佐

鳥のおばあさんは、どんなはねがいいか考えました。そして、「このもも色のがいいだろう。」

と言って、小さなもも色のはねをかる子ちゃんに渡しました。

「これは小さいけれど、よくとべるよ。これをあげよう。このはねをにぎって、ぐるぐるまわしなさい。はねの先を上にもむけると、あがっていく。下にもむけると、さがる。早くまわすほど、早くとべる。まあ、自分でいろいろやってみるがいい。とばないときは、入れてポケットにおくのだ。どうだ、ちょっとやってみないか。」

そこで、かる子ちゃんは、そのはねをにぎって、先さきを上にもむけてぐるぐるまわすと、からだですーつとあがっていきました。とちゆうから、はねの先さきを下にもむけてまわすと、だんだんさがってきます。しずかにまわして、原っぱの草の上に、ふわりとおりました。

「うん、そのちようし、そのちようし、じようず、じようず。では、持っていきなさい。また、用事があつたら、くるがいい。だが、朝早く来なさいよ。わたしはねぼうの子は大きらいだ。」

かる子ちゃんは、鳥のおばあさんにありがとうを言つて、はね

をふりまわし、いそいで帰りました。桜の枝にも、池のまわりにも、小鳥が大ぜいいます。

ビービービービー

チュンチュンチュンチュン

ピーチク ピーチク ピーチク

クルクルクルクルクル

ポッポッポッポ

ビーグル ビーグル ビーグル

チチチッ チチチッ チチチッ

ケキョ ケキョ ケキョ

にぎやかなこと、 にぎやかなこと。

やかましいこと、 やかましいこと。

そのうち、すずめやうぐいすがかる子ちゃんをみつめました。

「あれ、かる子ちゃんがとんでいるよ。」

「わあ、すてき。」

「ケキョ、ケキョ、かる子ちゃんよかったね。」

かる子ちゃんは大すきな桜さくらの木のとっぺんにこしかけました。

小鳥たちは、かる子ちゃん自分たちと同じようにとべるので、

大喜びです。

「かる子ちゃん、いっしょにあそぼうよ。」

「かる子ちゃん、きょうそうしようよ。」

しかし、かる子ちゃんは、早くうちに帰って、おかあさんたちに知らせたいと思いました。

「ちょっと、待っててね。おかあさんに会ってくるから。」

かる子ちゃんは、はねをぐるぐるまわして、木の枝からとびだしました。そして、あいた窓まどからさっとうちの中にはいりました。ごはんをたべていたおかあさんたちはびっくりしました。

「ああ、おどろいた。だれかと思った。かる子ちゃんか。」

「今日はまにあったのね。」

「とべるようになって、うれしいでしょう。」

かる子ちゃんは、今朝、鳥のおばあさんに会ったことや、しけんをうけたこと、はねをもらったことを話しました。そして、もも色のはねをみんなに見せました。

「なんだ、こんな、ちっちゃなはね？」

「でも、よくとべるのよ。」

かる子ちゃんは、はねをにぎって、ふりまわしました。そし

て、すーっと窓から出ました。おかあさんたちが庭に出てみると、かる子ちゃんはもう高くあがっています。

「すてきななあ、あんな高いところにいる。」

「だいじょうぶかしら、落ちたらいへんだわ。」

そのうちかる子ちゃんは、すーっとおりてきました。そして、桜の木のでっぺんに腰をおろしました。

小鳥たちがかる子ちゃんをささいました。

「かる子ちゃん、はやく遊ぼうよ。」

かる子ちゃんは、

すずめやつばめやう

ぐいすといっしょに

とびまわりました。

かる子ちゃんは、

ごほんのときやべん

きょうのときやねる

ときは、鳥のおばあ

さんに言われたよう



に、はねをポケットにしまいました。

桜の枝にこしかけても、もうまえのようにじっとしてはいませんでした。ほかの鳥ときょうそうをしたり、いっしょに遠くへとんでいったり、たかーくあがったりしました。かる子ちゃんはとても早くて、どんな鳥もかる子ちゃんにはまけてしまいました。

かる子ちゃんは遠くへ行くのが好きです。川のそばへも行きました。海のそばへも行きました。山の中へも行きました。大きな町へも行きました。たかといっしょに富士山のまわりを二回も三回もまわりました。そのうちかる子ちゃんは、もつともつと遠いところへ行きたくまりました。だれも行かないところへ行きたくまりました。だれも知らないところへ行きたくまりました。

だれも行かないところって、どこでしょう？ だれも知らないところって、どこでしょう？

かる子ちゃんは朝早くおきて、鳥のおばあさんのうちへそうだんに行きました。

鳥のおばあさんはかる子ちゃんの話を書いています。

「南極や北極はもう大ぜいの人が行っているし、月や星は学者がいろいろしらべているが、一つだけ、まだだれも行つたことのない

い星、だれも知らない星がある。『子どもの星』という星だ。そこへ行ってみたらどうだろう。」

「それはどう行ったらいいんですか？」

「ここからは見えないが、月のそばまでとんでいくと、その東のほうに、キラキラ、キラキラ、とてもきれいにひかっている星がある。それが『子どもの星』だ。かわいらしい天使が大ぜい住んでいる。青々としたしばふの上で、鳥もけものも毎日たのしく暮らしている。美しい花が咲いて、おいしいくだものがいっぱいなっているということだ。ぜひ、行くといい。」

「では、そこへ行きます。」

「ちょっと、お待ち。はねをとりかえてあげよう。」

鳥のおばあさんは、べつのふろしきづつみを持ってきて、中から、まえのはねよりもっと大きな、むらさき色のはねをとりだしました。

「このほうがずっと早くとべる。これなら、地球の外へとびだすこともできる。空気がなくなるとこまるだろうから、このきれをあげよう。これを鼻にあてていけば、けっして息の苦しくなることはない。」

おばあさんはふろしきの中から小さなきれを出して、かる子ちゃんに渡しました。おばあさんはまた、こめつぶぐらいのつぶをたくさん出して、

「これをつたべれば、一年ぐらいいは何もたべなくても、だいじようぶだ。」

それからまたおばあさんは、すぎとおった小さな玉をいくつか出して、

「この中には水がはいっている。一つぶたべれば、一年ぐらいい水を飲まなくてもいい。」

と言って、かる子ちゃんに渡しました。

かる子ちゃんが『子どもの星』へ出かけるということをきいたおかあさんは、とちゅうでかぜをひかないように、外套をこしらえました。おねえさんは、空気のきれや、たべもののつぶや、水の玉を入れる袋を作りました。おにいさんは、遠くのよく見えるほうえんきょうを貸しました。これも、おねえさんの作った袋に入れました。

いよいよかる子ちゃんが『子どもの星』へ出かける日がきました。おかあさんとおにいさんとおねえさんは庭に出て、かる子ち

ちゃんを見送りました。

「行ってまいります。」

と、かる子ちゃんが元気に言いました。

「行ってらっしゃい、気をつけてね。」

「人工衛星にぶつからないように。」

「帰ったら『子どもの星』のお話、たくさんきかせてね。」

「おみやげ忘れないでね。」

かる子ちゃんが、むらさき色の大きなはねをまわしてあがっていくと、たくさん鳥が、いっしょに、パッととびたちました。とちゅうまで送っていくのです。かる子ちゃんは、はねをぐるぐるまわしました。かる子ちゃんの早いこと、早いこと。おかあさんたちには、もう、小さな一つの点のように見えます。

「行ってらっしゃーい。」

「行ってらっしゃーい。」



「かる子ちゃん、行ってらっしゃーい！」
こうしてかる子ちゃんは『子どもの星』
へ出かけていきました。

『子どもの星』のお話は、また、このつぎに、いたしましょう。

(おわり)

幼児の教育 第五十七巻 第八号

八月号 © 定価 五十円

昭和三十三年七月二十五日印刷

昭和三十三年八月 一 日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 発行 者 津 守 真

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします。